とーりまかし
リサーチセンター

別冊

研究年鑑 2018

RECRUIT

2

「100年後に歴史が変わった」といわれる
根本的な地域・社会システム変容に向けて

境界を越えた共創で、新時代のうねりを創る「コクリ！2.0」

研究員
三田 愛
さんだ　あい

今、地方創生でよく聞かれるのは、「稼ぐ地域・PDCA・KPI・ビッグデータ・生産性向上」といったキーワードだ。これらはいずれもビジネスの現場でよく使われる言葉で、言わば「ビジネスアプローチ」である。地域を1つの企業に見立て、地域経済の活性化・雇用増加・人口増加を図ろうとする手法だ。

人口減少の時代に地域を盛り上げるには、こうしたアプローチが欠かせないのは確かだろう。しかし、それだけでは地方創生・地域再生がなかなかうまくいかないのも片方の真実である。なぜなら企業と違い、地域は経済だけで動いているわけではないからだ。そこには、日常の生活や文化があり、地域コミュニティ・教育・医療・福祉・子育てなどの場があり、普段の付き合いや祭りや冠婚葬祭がある。地域全体を活性化させるには、ビジネスアプローチとは別のアプローチも必要なのだ。

テーマ 2

「100年後に歴史が変わった」といわれる
根本的な地域・社会システム変容に向けて

境界を越えた共創で、新時代のうねりを創る「コクリ！2.0」

歴史の大きな転換期に生きている私たち。これからの未来を創るためには、過去の延長や「部分最適」ではなく、「システム全体」を扱う、新しいアプローチが必要だと感じている。「辺境からイノベーションは生まれる」といわれるが、地域はまさに「先端」であり、課題の縮図であり、そしてシステム全体を「自分ごと」として捉えられる可能性が高い。部分最適ではない「根本的な地域・社会システム変容」に向けた研究を行った。

研究員
三田　愛
さんだ　あい

第1章 目的

海外では先行。多様な影響力ある人が長期間探究する場

世界には、複雑な問題に対して多様なステークホルダーが長期間コミットし、ビジネスアプローチ以外の方法で探究し、システム変容を起こす団体・コミュニティが存在する。例えば、持続可能な食糧システムの革新を促す「サステナブル・フード・ラボ（SFL）」や、公正な金融システム実現を目指す「ファイナンシャル・イノベーション・ラボ（FIL）」だ。SFLは、世界が現在必要とする食糧をまかなうだけの農業や食糧供給を確保し、さらに将来の需要に備えて世界の食糧供給能力を増強することを目的に2004年に設立。米国、欧州、中南米を中心に、農業、製造業、食サービス行、小売業、NPO、公共部門、フィランソロピーなど、70余りの多様な企業や団体のメンバーで構成されている。ユニークなのはそのプロセスだ。企業や団体のリーダーが生産現場（グアテマラ農場等）を訪れ、そこでの知覚や考えの振返りを共有し対話することで、自分自身の新たなメンタルモデル（意識・無意識の前提）への気づきを重ねる「ラーニング・ジャーニー」や、48時間、砂漠など荒野や山の中で1人で思索の旅を行い、新たなメンタルモデルを迎える「ソロ」などを経た上で対話することで、利害関係のある者たちが日常の延長ではないところで新たなサプライチェーン全体の解決策を創発していくのだ。[※1]

日本では、有識者会議やカンファレンスはあれど、影響力がある人たちが、長期間・長時間、ディープに、探究しあう場はほぼ存在しない。しかし、複雑に入り組んだ課題には、通常のアプローチだけではもう太刀打ちできない。こうした新時代のアプローチが必要な時代ではないか。

「時間がかかる・怪しい・一時カオスが起こる」を乗り越える

コクリ！プロジェクト[※2]（以下コクリ！）では、システム変容を起こすには、通常の場づくりでは難しく「時間がかかる・怪しい・一時カオスが起こる」が乗り越えるべき壁と設定。そして、これまで研究してきた、境界を越えた多様な人たちの関係性構築のコクリ！1.0から、地域・社会システム変容を起こしていく「コクリ！2.0」へと舵を切った。それは私たちが「リスクをとって研究・社会実験する」という覚悟の表れでもある。参加者が多忙で影響力がある人が増えるほど、貴重な時間を使ってもらっているとアンパイ（安全で失敗がない）な手法に走りがちである。しかし安全で失敗がない手法のみだと100年後に歴史が変わっているような変化は起こせない。

地域・社会のシステム変容の研究「コクリ！2.0」

コクリ！のミッションは【コ・クリエーション（共創）を通じて、一人ひとりが本領を発揮し、100年後に「ここから歴史が変わった」といわれる社会実験を起こす】ことだ。コクリ！はそのために、地域リーダー、首長、官僚、企業、大学、NPO、クリエイターなど多様な全国のコミュニティメンバー約200人[※3]と共に、プロトタイピング・社会実験を行う「研究コミュニティ」だ。

これまでコクリ！プロジェクトでは、2011年からの3年で、地域の共創を促す「地域コ・クリエーション」を研究した後、次の3年で、各地域や都市の多様なメンバーが互いにつながって学び合うコクリ！キャンプ、コクリ！ラボなどの「全国コミュニティ」を醸成してきた[※4]。

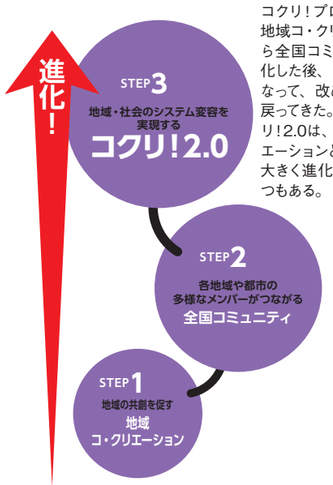
そして、2017年からは再度地域にフォーカスを当て、地域のシステム変容、ひいては社会のシステム変容を起こすための研究・実証実験に入った。これが「コクリ！2.0」である（**図1**）。地域は、システム全体を感じられるという点で地球の縮図であり、コクリ！では「社会がシステム変容を起こすための研究フィールド」と捉えている。少なくとも地域・社会システム変容は数年以上かけて起こしていくものと捉えており、まだ進化途中ではあるが、本稿では

地域・社会システム変容を起こすための
コクリ！2.0手法

を研究し、この1年で見えてきたものをお伝えする。

第2章 方法

図1　コクリ!プロジェクトの歴史



コクリ！プロジェクトは、地域コ・クリエーションから全国コミュニティに進化した後、コクリ！2.0になって、改めて「地域」に戻ってきた。しかし、コクリ！2.0は、地域コ・クリエーションと比較すると、大きく進化した点がいくつもある。

コクリ！2.0の研究の第一の特徴は、金融資本・人口・KPI・生産性などの数値をはじめとする「目に見えるもの」ではなく、地域内の人間関係やさまざまなつながり、あるいは一人ひとりの自己変容といった「目に見えないもの」を一貫して重視していることだ。

目に見えるものは、共有したり、外部に成果を示したりする際には非常に便利だ。しかし、数値などを測る際に、目に見えないものを大量に切り落としている。例えば、どの地域にも目に見えないさまざまな力が働いており、地域内の人間関係や力関係が多くの物事を左右しているが、そうしたものは決して数値には表れない。しかし本来、そうした目に見えないものを無視して、地域を変えることはできないはずである。そこで、コクリ！2.0では、目に見えるものよりも「目に見えないもの」を重視し、ビジネスアプローチとは違う「身体の智慧、システムの探究、超長期の時間の旅、アート等を組み合わせたアプローチ」を探究しながら、新しい手法を開発しては、仲間たちと実証実験を続けてきた（**図2**）。

なお、これらの研究や実証実験は、コクリ！のコアメンバーである嘉村賢州氏（非営利活動法人場とつながりラボhome's vi代表理事）、橋本洋二郎氏（株式会社To Beings代表取締役社長）をはじめとする場づくり・組織開発のプロフェッショナルや、元戦略コンサルタントの太田直樹氏（前総務大臣補佐官）たちと共に進めている。

第3章 結果

1年間に渡る様々な研究・実証実験より

A　より大きな規模で地域や社会をシステム変容していくための場づくりの方法論「場づ

※1
出典:SFLホームページ
http://www.sustainablefoodlab.org/
・ジャパン・フォー・サステナビリティ(2008)『世界の大手食品会社や小売業によるサステナブル・フード・ラボ 講演内容』
・REOS PARTNERS (2010)『THE SUSTAINABLE FOOD LAB A Case Study』
・REOS PARTNERS (2013)『REOS PARTNERS 2013 CHANGE LAB CASE STUDY SERIES The Sustainable Food Lab Growing Mainstream Sustainable Food Chains』

※2
コクリ！プロジェクト
2011年にじゃらんリサーチセンターの研究として始まり、現在は「任意団体」（リクルートはスポンサー）として、志を共にする多様な仲間の実行委員会制で運営している

※3
コクリ！プロジェクト運営体制とコクリ！メンバー
http://jrc.jalan.net/cocre/cocre/about-us/

※4
地域コ・クリエーションは「とーりまかし」32号・33号・38号で全国コミュニティは38号・44号でそれぞれ紹介している

テーマ 2

「100年後に歴史が変わった」といわれる
根本的な地域・社会システム変容に向けて

境界を越えた共創で、新時代のうねりを創る「コクリ！2.0」

Papers by 三田 愛研究員

くり6つの要素」（図3）

B　非日常の場だけでなく、日常の中で変化が継続するための仕組みとして、一人ひとりのあり方・行動指針「コクリ！7ヶ条」

C　新たな概念「ジェネレイティブ・インテンション（GI）」

上記ABについて説明すると共に、

D　Aを使った場の地域事例「コクリ！海士」

を紹介する（Cについては考察で触れる）。

図2　コクリ!2.0　主な実証実験概要

コクリ!研究合宿
日時：2016年9月30日～2016年10月2日（2泊3日）
場所：軽井沢
参加者：島根県海士町・雲南町・長野県小布施町などの地域リーダー、官僚、大企業経営者、事業開発、大学教授、NPOなど15名
ファシリテーター：井上英之氏※5、井上有紀氏※6、橋本洋二郎氏、嘉村賢州氏、三田愛
用いた手法：フューチャーコラージュ※7、マイプロ※8、ソーシャル・プレゼンシング・シアター（以下SPT）※9等

コクリ!2.0
日時：2017年2月14日
場所：大本山増上寺（東京都港区）
参加者：町長（小布施町、海士町、熊本県南小国町）、熊本県黒川温泉・岡山県西粟倉村・海士町・宮崎・京都・長野県塩尻市等地域リーダー、官僚、NPO、大学教授、企業経営者、組織変革プロフェッショナル、クリエイター、メディア等33名
ファシリテーター：嘉村賢州氏、橋本洋二郎氏、三田愛（以下コクリ！研究チーム）
用いた手法：百年の年表ワーク、ストーリーテリング、SPT、この指とまれ分科会等

コクリ!海士2017
日時：2017年4月14日～16日（2泊3日）
場所：島根県隠岐諸島海士町
参加者：海士町の島民36人（漁業、福祉、商店、役場、教育、広報など）、コクリ！メンバー（企業、大学、官僚、プロデューサー、編集、地方行政など）31人
ファシリテーター：野村恭彦氏※10、コクリ！研究チーム
用いた手法：関係性構築としてのつなひき、ストーリーテリング、ラーニング・ジャーニー、SPT、たとえば未来ワーク等

コクリ!キャンプ2017
日時：2017年11月7日
場所：大本山 巨福山　建長寺（鎌倉）
参加者：地域リーダー、首長、官僚、企業、大学、NPO、クリエイター、組織開発プロフェッショナル、琵琶奏者、AI専門家、教育専門家、華道家等、多様な124人※11
ファシリテーター：コクリ！研究チーム
用いた手法：瞑想、ストーリーテリング、GIトレンド探究、SPT、GI版この指とまれ分科会等

※5 井上英之氏
慶應義塾大学 特別招聘准教授／INNO-Lab International 共同代表

※6 井上有紀氏
INNO-Lab International
共同代表・慶応義塾大学大学院非常勤講師

※7
フューチャーコラージュ
自分の未来を想像し、様々なジャンルの雑誌から直感的に写真を切り取り、大きな紙に自由にレイアウトする。
未知の自分の未来を具現化する方法

※8 マイプロ
「マイプロジェクト」の略。井上英之氏考案。
一人ひとり「わたし」が感じている違和感・問題意識・想いからプロジェクトを実践する

※9
ソーシャル・プレゼンシング・シアター
言葉を使わず、身体の動きだけである状況を演劇的に表現するワーク。システム・関係性の中で言葉にならない何かがどう現れているかが映し出される

※10 野村恭彦氏
株式会社フューチャーセッションズ 代表取締役、KIT虎ノ門大学院教授

※11
参加メンバーリストはホームページに記載している
http://jrc.jalan.net/cocre/camp/3rd_member/

A　システム変容のための場づくり方法論「場づくり6つの要素」

これから詳しく説明するが、コクリ！2.0では、「脱リーダー偏重主義」「イニシャルシステム」といった対等な関係で創発しやすい場の構造と、「システム思考とシステムセンシング」「超地域のコ・クリエーション」などの変容と創発を起こす仕組みとプロセスを通じて、「一人ひとりの自己変容」を起こし、それが「まるごと変容」につながっていくと考えている。そして、まるごと変容が、また一人ひとりの自己変容を呼び起こすのだ。

なお、コクリ！2.0の場づくりをする際は、主催者が「覚悟」を持ち、リスクを取ってチャレンジすることが重要である。そのあり方が伝播し、一人ひとりの自己変容につながっていく原動力となるからである。

地域リーダーだけに依存していては地域をうまく変えていけない

❶まるごと変容

コクリ！2.0では、地域に存在する目に見えない構造や隠れた相互作用、あるいは地域の皆さんのメンタルモデル（考え方の前提）を感じ取り、変容させていくことで、ビジネス・雇用・文化・社会関係資本（人間関係の質）・コミュニティ・教育・医療・福祉・子育て・交流・テクノロジー、住民一人ひとりまで、地域のさまざまなことをまるごと変えようとしている。なぜなら、地域では、それらが密接かつ複雑に結びついているからだ。コクリ！2.0は、まるごと変容を目指すことで、無理のない地域変容を実現しようとしている。（**図4**）

❷脱リーダー偏重主義

これまでは、少数の「地域リーダー」がスポットを浴びがちだった。しかし最近、地域リーダーだけに依存していては、地域をうまく変えていけないケースが多いことがわかってきた。なぜなら、私たちにはリーダーの力を高く見積もりすぎてしまう傾向があるからだ。私たちはつい、地域リーダーはもっとできると考え、さまざまな責任や業務を押しつけてしまうのだ。それでつぶれてしまうリーダーも少なくない。

そこで、コクリ！ 2.0 では、「脱リーダー偏重主義」を打ち出している。例えば、リーダーの下にいるナンバー2がより大きな力を発揮したり、現場で働く若手メンバーがもっとイキイキと主体的に動くように促すことで、地域のまるごと変容が加速すると考えている。これは、野球やサッカーなどで、エースや中心選手だけが頑張るのではなく、チームがまとまって「全員野球」「全員サッカー」をするほうが、チームが強くなることに似ている。

この脱リーダー偏重主義を実現するためには、少数のリーダーだけが集まる場ではなく、リーダーを含めた多様なメンバーが対話し、つながれる場をいくつも設けていくことが大切だ。そうした場が、地域の一体感を少しずつ育んでいくのだ。

❸イニシャルシステム

コクリ！には、「想いは似ているが、違うセクターの3人以上」というチーム分けのルールがある。ベースになる想いや考え方は近いのだが、普段は違う場所にいたり、立場がまったく違ったりする方々を引き合わせると、想定以上の化学反応が起こることがあるのだ。例えば、P22、23ページに紹介したコクリ！海士2017のホームグループには、このルールが適用されている。

コクリ！2.0では、こうしたいくつかのルールやパターンを利用して、最適な「イニシャルシステム（システムの初期状況）」を追求している。ちなみに、コクリ！では、こうしたルールやパターンのもとでチーム分けをする際、かなりの時間と手間をかけている。コクリ！プロジェクトは、それほどイニシャルシステムを重視しているのだ。

コクリ！2.0は、参加者の対話や行動から偶然の創発が起こることを狙っており、主催者側はできるだけ途中の介入を少なくしている。その分、チームメンバーが対等に学び合い、深くつながりたいと思える環境や組み合わせ

図3　場づくり6つの要素全体図

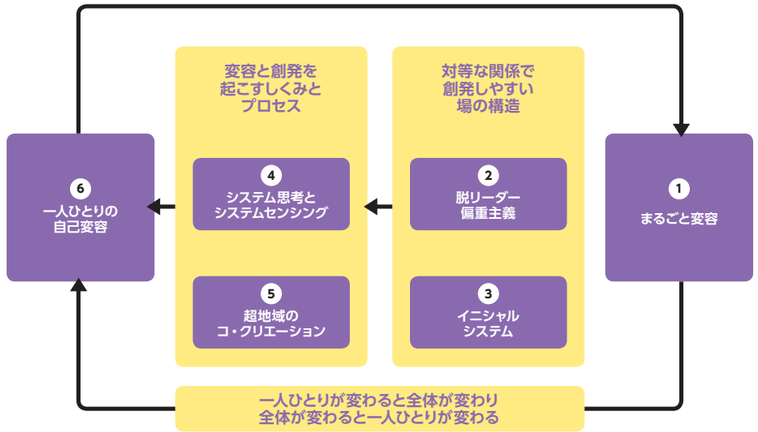
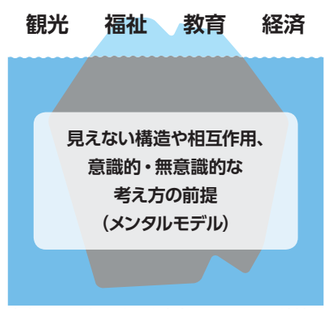


図4　まるごと変容



氷山の下に隠れたものを変容させることで、地域のさまざまなことを変えていくことができる

テーマ 2

「100年後に歴史が変わった」といわれる
根本的な地域・社会システム変容に向けて

境界を越えた共創で、新時代のうねりを創る「コクリ！2.0」

Papers by 三田 愛研究員

を作ることに大変な注意を払っているのだ。初めの出会い次第で、その後が大きく変わる可能性があるからだ。

一人ひとりの自己変容が地域システム全体を変える原動力になる

❹システム思考とシステムセンシング

地域のまるごと変容を起こす際に欠かせないのが、コクリ！2.0の場の参加者に「システム思考」と「システムセンシング」を体験・体感していただくことだ。システム思考とは、あるもの（この場合は地域）を1つのシステムと見て、そのシステムにある問題を見出し、新たなチャンスを見つける思考法のことで、システムセンシングとは、そのシステムを身体で感じることである。

コクリ！2.0の参加者の皆さんには、「対話」や「身体ワーク」などのプログラムを通して、この地域システムとその問題点を具体的に考え、感じていただくようにしている。

その結果、参加者の皆さんは、たとえば「自分の考え方や行動が変われば、ひょっとしたら地域が変わるのかもしれない」と、頭と身体の両方で理解していく。これが、まるごと変容の第一歩となる。

❺超地域のコ・クリエーション

コクリ！2.0には、地域の皆さん以外に、都市や他の地域からの参加者（コクリ！メンバー）が必ず参加している。そして、地域の皆さんと地域外の皆さんの「あいだ」に創発を起こそうと狙っている。これが、地域を超えた「超地域のコ・クリエーション」だ。地域外のメンバーが地域の皆さんと対等な立場でつながり、相互に学び合いながら、一緒に新たな取り組みを行うことで、変容のきっかけを作ろうとしているのだ。

なぜ超地域のコ・クリエーションを重視するかと言えば、「あいだ」こそ、最も創発が起きやすいからだ。当然、地域メンバーと地域外のメンバーのあいだには、先ほども触れたように「相違点」がある。たとえば、物事の見方がまったく違うケースは少なくない。こうした相違点のあいだに、画期的な「第三の道」が見つかることがよくあるのだ。私たちは、その第三の道からイノベーションが生まれ、地域を大きく変えることを期待している（**図5**）。

❻一人ひとりの自己変容

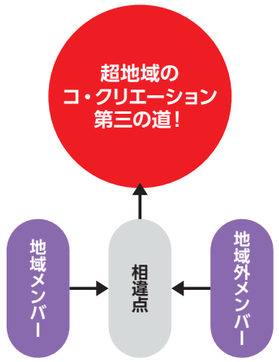
地域のまるごと変容に最も効果的なのは、地域の方々一人ひとりの見方や考え方が「進化」し、生き方や働き方が根本から変わることだ。コクリ！の場で、超地域のコ・クリエーションなどを通して見方や考え方の本質的な部分が変わると、その人の物事への対処の仕方や周囲への接し方が大きく変わる。私たちは、これを「自己変容」と呼んでいる。

コクリ！2.0では、参加者一人ひとりの自己変容が、地域システム全体を大きく変える原動力になると考えている。たとえば、地域リーダーが周囲への接し方を変えると、当然、周囲に良い影響が及ぶ。その結果、リーダーの下にいるナンバー2やメンバーなどが動きやすくなれば、地域が少し良い方向に向かうだろう。こうした自己変容が連鎖的に起これば、地域は数年で劇的に変化することもあり得るというのが、私たちの仮説の1つだ。

これは、「ツボを押すと、身体の調子が良くなる」という中国医学の考え方に似ている。地域システムが身体だとすれば、地域の一人ひとりがツボだ。コクリ！2.0は、地域内のいくつものツボを押すことで、地域全体の調子が徐々に良くなっていくと考えているのだ。

前述「場づくり6つの要素」を使って開催した「コクリ！海士」をP22、23で紹介する。

図5 超地域のコ・クリエーション



あり方・行動指針である「コクリ！7ヶ条」が記された「たねびブック」。毎日肌身離さず、何かある時に眺めるというコクリ！メンバーもいる

日常で変化を継続する仕組み B 「コクリ！7ヶ条」

非日常の場だけで変化は起こせない。本質的なシステム変容を起こしていくには「日常」の生き方が変わっていくこと、つまり「一人ひとりが自己変容」していくことが大切と考えている。日常の中で、「本物の自分」であり続けるために、他の人と組み合わせによるコラボレーションだけではなく「深いコ・クリエーション」を起こしていくために、結果的に「歴史を変えるようなシステム変容」を起こしていくために、生きていくうえで大切な「あり方・行動指針」を「コクリ！7ヶ条」としてまとめた。大切な観点だけでなく「問い」も用意し、自分との対話が促進されるように設計した。また、いつでも持ち歩けるように、蛇腹型の「たねびブック」としてまとめた。

【コクリ！7ヶ条】

❶自分の「根っこ」とつながる
一人ひとりが、その人だけのギフトを持っている。湧き上がる想いに従って、本領を最大に発揮したときにこそ、生まれてきた意味を感じられるはず。忙しい日常の中では「やらねば」サイクルに振り回されることもあるけど、「やりたい」サイクルで生きていこう。

◆このために生まれてきた、と感じる“根っこの想い”はなんですか？

❷恐れを超えて、未知に踏み出そう
安全地帯から抜け出して、未知の自分にチャレンジしよう。最初は不安や居心地の悪さがあるかもしれない。でもその先に、予想だにしない未来の自分がいる。自己変容へのオープンさが、社会の新しい扉を開く。見守ってくれる仲間がここにはいる。

◆未知の自分が3割あるとしたら、それはなんだろう？

❸仲間と「根っこ」でつながる
肩書を外した「まるごとの人」として相手とつながろう。今の仕事や立場だけでなく、その人の根っこの想いや、その人もまだ見えていない可能性を見いだそう。その人の痛みを自分の痛みに感じるほどの運命共同体になったとき、本物のコ・クリエーションが起こる。

◆その人の、エネルギーが湧き出る“想いの源泉”ってなんだろう？

❹「身体の声」は可能性の扉
今までの思考の枠組みを超えて、新しい何かを生み出したいなら、頭が「考える知性」と同じくらい、身体が「感じる知性」も大事にしよう。身体の喜びや違和感は、人間が持っている超高性能なセンサーからの大事なシグナル。「身体の声」に耳をすまそう。

◆頭はまだ知らない、身体が知っている智慧はなんだろう？

❺自分を巡る大きな環に想いを馳せよう
先人が紡いできた長い歴史を感じること、数世代先の未来を見据えること。私たちは命のバトンをつないでいる。生命・自然・経済・産業は全てつながり、お互いに影響し合っている。システム全体や循環を感じることから、私たちの使命が見えてくる。

◆100年後からみて、私たちが本当に起こすべき行動はなんだろう？

❻集合的無意識のなかに、次の時代のうねりがある
多様性を持った私たち。その集いの中から、集合的無意識に眠る兆しを掘り起こそう。異なる価値観に心を開き、耳をすまそう。もやもや・ゆらぎにゆられながら、未来を示す、時代の声なき声を感じよう。次の時代のうねりは、すでに生まれているはず。

◆まだ形になっていない、私たちの無意識の願いはなんだろう？

❼信じる世界を、体現しよう
「信じる」力を信じよう。このコミュニティもフィールドも、壮大な実験室。妄想を信じる仲間がここにいる。すぐ形にして確かめる。確かめて壊して、また作るを繰り返すと、ありたい形が見えてくる。今ここから信じる未来を生きてみよう。

◆心から願う、作りたい世界を、今生きていますか？

D システム変容の実証研究事例「コクリ！海士プロジェクト」

コクリ！2.0の実証研究として、島根県隠岐諸島海士町[※12]と共に「コクリ！海士プロジェ

テーマ 2

「100年後に歴史が変わった」といわれる
根本的な地域・社会システム変容に向けて

境界を越えた共創で、新時代のうねりを創る「コクリ！2.0」

Papers by 三田 愛研究員

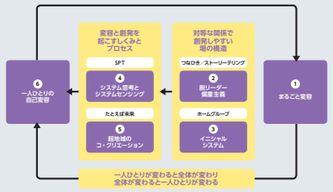
コクリ! 海士2017の3日間とその成果

15年間牽引した山内町長はじめ、リーダーたちの引退が近づいており「第二変容期」を迎えている海士町。この第二変容を促進する存在として、コクリ！海士はスタートした。海士町メンバー36人、コクリ！メンバー31人での、3日間のキックオフの内容と雰囲気、成果やその後の変化をお伝えする。

準備

ナンバー2が準備を仕切った

コクリ!海士2017には、海士町メンバー約30名と島外のコクリ!メンバー約30名が集まった。ここでまず重要だったのは、地域リーダーだけでなく、海士町の多様な30名が一堂に会したことだ（**②脱リーダー偏重主義**）。また、今回の3日間を海士町側で仕切ったのが、地域リーダーの1人・株式会社巡の環・代表取締役の阿部裕志氏ではなく、その下で働くナンバー2の岡部有美子氏だったことにも脱リーダーの意味合いがあった。それから、参加者を6つの「ホームグループ」に分けたのだが、研究チームは、このグループ分けをギリギリまで考え抜いた（**③イニシャルシステム**）。その成果として、参加者からは「何かが起こらないわけがないと思えるようなホームグループの組み合わせだった」「本当に心地がよくて、安心できるメンバーと出会えた」「なぜか最初から安心して深い話ができた」という声が聞かれた。



P19図3「場づくり6つの要素」と、文中の数字が対応

1日目

つなひきとストーリーテリング

1日目、コクリ!メンバー一行はお昼に海士町につき、昼食後に海士町メンバーと対面して、いきなり「つなひき」をした。なぜなら、毎年まちを挙げてのつなひき大会が行われるほど、海士町はつなひきが盛んなまちだからだ。このつなひきは、島外のメンバーが海士町に入る儀式であり、海士町メンバーとコクリ!メンバーが対等の立場で対話する雰囲気をつくる仕掛けの1つだった。その後、海士町3名・コクリ!3名のホームグループで「ストーリーテリング」を行った。6名全員が自分のストーリーを語り、他のメンバーは耳を澄まして、互いに学び合う時間だ。その際、どのチームも海士町メンバーの誰かに縁のある場所に移った。あるチームはメンバーの自宅に行き、あるチームは隠岐國学習センターで語り合った。海士町とコクリ!のあいだを考える「**⑤超地域のコ・クリエーション**」は、このつなひきとストーリーテリングから始まっていた。

コクリ！海士2017は隠岐神社でのつなひきからスタート

参加者の1人のお母さんの自宅でストーリーテリングをする参加者たち

2日目

身体ワークで地域システムを感じる

2日目の午前中にストーリーテリングの続きを行った後、午後は「身体ワーク」を行った。自分の体を「彫刻」のようにして、現在の悩みを表現したり、何人かが役を持って、言葉を一切使わずに体の動きだけで、海士町で起きている複雑な状況をあたかも演劇のように表現する「ソーシャル・プレゼンシング・シアター（SPT）」を上演したりした。地域の中の言葉にならない何かが目で見え、配置として感じられる時間は画期的で、多くの参加者が「新鮮な体験」「気づきが多かった」と語った。（**④システム思考とシステムセンシング**）。

これも身体ワークの1つ。皆で背中を合わせると、一人ひとりにさまざまな感情が湧いてくる

SPTに取り組む参加者の皆さん

立っている人も寝ている人もやはり身体ワークの最中

夜遅くまで語り合っていた参加者たち

3日目

「たとえば未来」で種火をおこす

3日目は、未来の海士町・地域・日本を考える「たとえば未来」のワークを行った。まさに「**⑤超地域のコ・クリエーション**」を起こすためのワークで、海士町メンバーとコクリ!メンバーが2人1組になってテーマアイデアを生み出し、そのテーマについて参加者が知恵を出し合いながら、海士町とコクリ!の間に何を生み出せるかを対話し、最後には山内町長とたまたま町役場のエレベーターで出会ったというシチュエーションのもと、各チーム短時間で山内町長に向けてプレゼンテーションをした。3日目はお昼で終了。「たとえば未来」のワークはあっという間で、もっと話したかったという参加者の声が多く聞かれた。これですべてのプログラムが完了。終わってみれば、あっという間の3日間だった。

「たとえば未来」で対話する参加者

「たとえば未来」が終わった後、すべての模造紙を並べ、それを囲む参加者の皆さん

最後は海士町メンバーの皆さんが帰りのフェリーを見送ってくれた

海士2017の成果

海士町とコクリ！の“あいだ”にいくつものアイデアが生まれた

コクリ!プロジェクトでは、対話から生まれた地域変容のアイデアを「種火」と呼んでいる。3日目の「たとえば未来」からは、いくつもの種火がおこった。たとえば、「ないものはない大学出版会」は、海士町の巡の環代表の阿部裕志氏と、首都圏で英治出版を経営する原田英治氏の間におこった種火だ。阿部氏は、海士が培ってきた「ないものはない」という思想を研究し、外部に伝える「ないものはない大学」を始めたいと考えていた。一方の原田氏は、出版社の新しい形として「英治出版のサテライトオフィス」を作りたいという構想を練っていた。この2人の想いの“あいだ”に立ち上がったのが、「ないものはない大学出版会」だ。出版会であれば、出版物を通して「ないものはない」を研究し、広めていくことができる。原田氏が出版のノウハウを提供し、阿部氏が海士町でメンバーを募って、出版会は実際に立ち上がろうとしている。「**⑤超地域のコ・クリエーション**」のわかりやすい事例だ。そして、「**⑥一人ひとりの自己変容**」も起こっている。なんと原田氏は、家族と共に2018年4月より1年間海士町に移住することが決まった。首都圏に本社を置く出版社の社長が、東京から6時間（海が荒れたらフェリー欠航になる）島根県の離島で暮らし働く、という社会実験だ。既にネットワークが広い原田氏は、様々な人を海士町に連れて行き、様々な新しい企画を企てている。1年後、原田氏に、共に新出版社を創る阿部氏や巡の環、そして海士町にどんな変容が起こっているのか、楽しみでならない。

阿部氏（右端）と原田氏（右から2番目）のホームグループの仲間たち

そのほかにも起こった! アイデアの種火
●教員デトックス＆パワープログラム●高校生リバースメンター●アマステイ●あまちゃん給食・あまちゃん定食（地産地消率300%）●プチコクリ@海士町図書館●革新のための余白を生む仲間づくり●アトリエ「色千舎（いろぜんや）」●つながり人口アップ●Enter! Ama ―海士の入り口に―●海士観光ホテル×リクルートの出会い●海士にしかない海士@天川café●中高生×中高年プロジェクト●活き活きと死ぬ「福死の学校」●ないものはない海士プログラム●海士流

次に紹介したいのは、学校の先生たちが“デトックス”し、“パワーアップ”するための試み「D&Pプロジェクト」。海士町にある隠岐島前高校の大野佳祐氏・中村怜詞氏、海士町教育委員会の山下真司氏、変革屋の佐々木裕子氏、前総務大臣補佐官太田直樹氏たちの発案。大学入試が様変わりする2020年に向けて教育改革が進む中、多忙な教員の意識は変わっていない。「自ら変わる機会」を得るため、悩みや不満を吐きだしデトックスしたうえで、新たな価値観や考え方を学んでパワーアップすることが必要という考え。2017年9月に島前高校教員と魅力化コーディネーター16名が参加し開催。“先生”として普段弱みを人前で見せられない教員たちが「自己開示」をし、普段絶対に話さない過去を話しあった。腹を割り本音を話す関係になり、決意したアクションプランも進めていっている。今後は、島根県の公立高校全体で継続的に実施できるように動いている。

コクリ！海士2017終了後、原田氏は英治出版の書籍200冊を海士町図書館に寄贈。海士町との絆を深めている

その他にも、東京の大企業の新規事業責任者が、海士町の高校生にメンターになってもらう「リバースメンター」、自分も大切な人も犠牲にせずに、人生や仕事を生きるために人生の引き算方法を学び実践し合う「引き算会議プロジェクト」など、数年かけてシステム変容していく変化の過程ではあるが、一人ひとりが自己変容し、本質的な変化（価値観・生き方・働き方など）をもたらす動きが進んでいる。

「D&Pプロジェクト」の様子。島前高校の先生の約半数が参加された

テーマ 2

「100年後に歴史が変わった」といわれる
根本的な地域・社会システム変容に向けて

境界を越えた共創で、新時代のうねりを創る「コクリ！2.0」

Papers by 三田 愛研究員

クト」を行っている。海士町は「若者が移住してくる島」「財政破綻の危機を乗り越えた島」として地方創生ではすでに有名な存在だが、「第二変容期」を迎えている。15年間牽引した町長はじめ、リーダーたちの引退が近づいており、次の地域のあり方を創る時期に入っている。コクリ！海士プロジェクトは、第二変容期に寄り添う形でスタートした。実証研究の詳細はP22、23に記載した。

第4章 考察

目に見えない世界のうねり「ジェネレイティブ・インテンション」

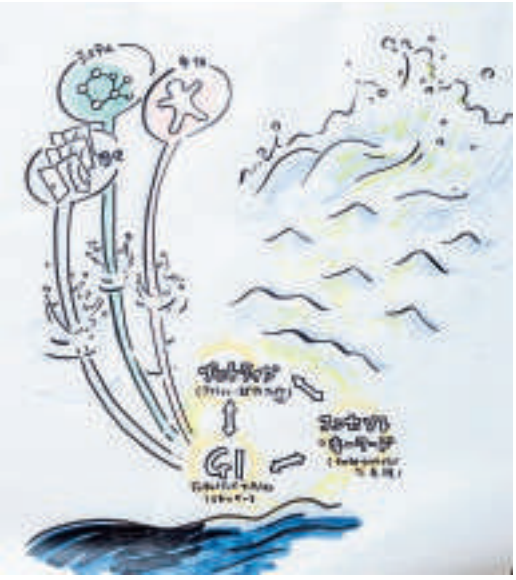
「時間がかかる・怪しい・一時カオスが起こる」という3つの壁を乗り越え「コクリ！2.0」として研究・実証実験を繰り返し、私たちは新たな概念**「ジェネレイティブ・インテンション（GI）」**を打ち出した。直訳すると「立ち現れる未来の意図」。「目に見えない世界のうねり」のことである。

コクリ！研究チームで、100年後から見て歴史が変わるために何が必要なのかを考え続け、気づいたのは、それぞれの時代を創り、大きく変えていくキーワードやコンセプトがあることだった。例えば「サステナビリティ」「オープンソース」「グローバリズム」などだ。

また、こうしたキーワードやコンセプトが言語化される前に、密かに世界を変えつつある「うねり」があることにも気づいた。うねりとは、基本的には目に見えないため、ほとんどの人は気づいていないが、確実に進んでいて、絶対に後戻りしない世界・社会の変化のこと。うねりの多くは、みなが意識していない時点では言語化されない。この「目に見えないエネルギー」を「ジェネレイティブ・インテンション（GI）」と名付けた。

さらに時代を変えるようなイノベーションや画期的な動きのことを「波」と例えている。いまなら、シェアハウスやシェアオフィス、民泊などが目立つ波と言える。私たちは、シェアハウスなどの波が大きくなる前から、所有するのではなく共有することで、互いに幸せになる経済を求める「うねり＝GI」があったと考えている。そのGIにいち早く反応した方々がシェアハウスなど「プロトタイプ」のビジネスを起こして成功させ、「シェアリングエコノミー」というキーワードを名付け、うねり＝GIが顕在化し、大きな波となった。この「世界のうねり」を感じ、「新時代の波」を起こす流れを「GIプロセス」と呼んでいる。

目に見えない非言語が得意な日本人の智慧は将来世界にも貢献できる。最高のコ・クリエーション社会に向けて、全国の仲間と共に、研究・社会実験し続けたい。



身体・歴史的視点・システムセンシングにより、ディープにダイブする。歴史を変える「うねり＝GI」を感じ、キーワードを名付けたり、プロトタイプを実践していく中で、大きな「波」になる

※12
島根県海士町
人口：2293人
（2017年）
Iターン 566人
（2003〜2015年）
牡蠣・隠岐牛など産業活性化、島留学・教育魅力化など様々な施策にチャレンジする島

二つの意味をもった「ないものはない」思想を大切にしている
①「ありません」
便利なものはなくてよい
②すべて「あります」
人が生きていくために大切なものはすべてここにある